

# 聞名仏教

第70号  
(発行日)  
2016年7月1日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒6638113 西宮市  
甲子園口2丁目7-20  
電話・FAX (0798)  
**63-4488**  
(発行人) 土井紀明  
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp  
http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》  
○ 〈同朋の会〉  
毎月22日 午後2時始。  
○ 〈念仏座談会〉  
毎月2日と12日 午後3時始  
○ 〈聖典学習会〉  
毎月6日 午後7時始。  
○ 〈真宗入門講座〉  
毎月18日 午後6時30分始。  
\* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

## 安楽仏土の依正は

(和讃問答)

安楽仏土の依正は

法蔵願力のなせるなり

天上天下にたぐいなし

大心力を帰命せよ

(語句)

安楽仏土——阿弥陀如来の浄

土

依正——依報と正報。依報と

は環境、正報とは主体、すな

わち依報とは浄土、正報とは

仏・菩薩のこと。

天上天下——一切世界。世界

中。

たぐいなし——比類がない。

大心力——法蔵菩薩の広大な

願心によるはたらきというこ

とで阿弥陀如来のこと。

現代語訳(安楽なる浄土やそ

こにまします仏・菩薩は法蔵

菩薩様の願心願力によって成

就されたのである。その浄土

は世界中に比類がない。この

ような浄土を成就された大い

なる願心願力のアマダ仏に、

よりのみたてまつれ)

\* \* \*

N「安楽仏土の依正は 法蔵

願力のなせるなり)

とありますが、このお心を話

してください」

D「このご和讃は曇鸞大師が

『讃阿弥陀仏偈』の中で種々

にアマダ仏のお浄土の尊いこ

と、浄土の仏・菩薩の徳の尊

いことを讃えられる中で、

〈みなこれ法蔵願力のなせる

なり。大心力を稽首し頂礼し

たてまつる。〉

と讃嘆されます。ここが有難

いということ親鸞聖人はこ

の

ように和讃されたのです」

N「法蔵願力のなせるなり」

とは」

D「安楽仏土というのはアミ

ダ仏のお浄土のことですが、

お浄土も、そしてそこに生ま

れて仏・菩薩にならしていた

だけのことも、全て法蔵菩薩

様が私たちのために、一切衆

生を仏にしたいという広大な

願いをおこされ、永い間思案

し、一切衆生を助ける方法を

見出し、それを実現するため

に、永きご修行をして下さっ

た。それによって出来あがっ

たのが浄土であり、それによ

って私たちも浄土に生まれて、

仏・菩薩にならしていただく

ことが出来、そして迷いの世

界に還って衆生を救うていく

お仕事にかぎりなく参加させ

ていただける。それはみな法

蔵菩薩様のご尽力のたまもの

である、とのお心でしょう」

N「法蔵願力のなせるなり」

というのは本当に力強く、有

り難さが感じられますね」

D「ええ、アマダ如来様の御

恩という云い方でもよいので

しようが、アマダ仏はもと法

蔵菩薩様であられた時の志願

が広大であり、この願を成就

せずはおかないという、その

ためにどれほど苦を受けても

よいという、そういう大いな

る慈悲の願心と尽力の強さが、

この一句から感ぜられますね」

N「南無阿弥陀仏のいわれを

聞くのが聞法であるといわれ

ますが、この法蔵菩薩様の大

いなる慈悲と願心の強さに心

を寄せることが大事ですね」

D「ええ、真宗の聞法は自己

を知ることでだといって、自己

反省ばかりしている場合があ

ります。やはり法蔵菩薩様

の大悲の深さ、広大さ、〈汝を

助けなければ私は仏の座には

つかない〉という強固な志願

を、南無阿弥陀仏において聞

くことが聞法には大事です。

自分の側だけを眺めていても

なかなかアマダ仏をたのむ信

心は起こりません」

N「自己反省をするだけでは

ラチがあかないとは」

D「たとえば、〈自分は自分の

ことばかりしか考えていない

利己的な人間だ〉とか、〈自分

の都合の悪いことは排除し、

自分に都合の良いことは歓迎

するような自己中心的な人間

だ〉、などと自己批判ばかりを

繰り返していてもというこ

とです」

N「しかし、私たちは〈自分

はまともな善い人間だ、悪い

のはアイツだ〉、などと自分を

肯定することばかりしていま

すから自己批判は大事なので

はないですか」

D「ええ真宗の聞法をする場

合、そういつた自己批判をし

ていくのは大切なことです。

自己反省をして〈自分は自分

のことは棚に上げて、他者を

責めてばかりいる〉などと懺悔

するのはいいのですが、そう

することが聞法だと思つて、

自分の方ばかりを眺めていて

も救いはなかなか明らかには

なりません」

N「なぜですか」

D「自分をどれだけ反省して

も、自分はどういう人間かは

分からないからです」

N「なぜ分からないのですか」

D 「自分の良心や知性で自分を知るの底が知れているからです。真宗の聞法は仏様の智慧によって見られている私の姿、それを聞かせていただくことによって自分はどういう存在なのかを知るのです」

N 「アミダ様が私をどのように見ておられるのか、仏のおん眼に私はどう映っているのか、いわば自分のモノサシで自分を批判するのではなくて、阿弥陀様が私たちをどう見ておられるのかという、仏様のモノサシで測られている私を知らせていただくのが聞法なのです」

D 「ええそうです。それと同時に、そんな私を救おうされているアミダ仏の大慈大悲のお心を聞かせていただくのです」

N 「では真宗の聞法とは単に自己批判をするのではなく、アミダ仏（南無阿弥陀仏）のお心を聞くとともに、自分はどういう人間であり、その私を救おうとされているやるせない慈悲心を聞くことなのですね」

D 「ええそうです。南無阿弥陀仏のお心を、申されるお念仏において聞かせていただくのです」

N 「では仏様がお知らせ下さる私とはどういう私ですか」

D 「一言で言えば、無知無能の煩惱だらけの罪深い存在であって助からぬ者とお聞かせ下さるのです」

D 「こういう私の姿は自己反省からは決して知られないのです」

D 「ええ、そうです」

N 「そうするとアミダ仏のお心をよく聞かせていただくことが大事ですね。ただお寺で聞法して、その時はそのように知らされたと思ってもすぐ忘れてしまいます」

D 「それだから一生聞法し続けるのです」

N 「そうするといつもかつもお寺に行つて聞法をしないとダメなのですか」

D 「いいえ、ひとたびアミダ仏のお心が私の心に届いて私の信心になって下さいますと、その信心は阿弥陀仏のお心（智慧と慈悲）ですから、信心の智慧は私の心を照らし続けて下さるのです」

N 「仏の智慧が凡心に離れず私の心を照らし続けて下さるのです」

D 「凡夫の私は忘れどおしですが、信心の智慧からその都度お知らせをこうむりつつ日暮しさせていただくのです」

煩惱の心は一生の間起こり続く中で、その都度お知らせをいただくのです」

N 「自分の煩惱の深い有様を知らされ続けていくのです」

D 「ええそうですね、自分は助かる縁も手がかりもない助からぬ身であるとお聞かせただくのが中心であり要であつて、単に自分の煩惱の一つ一つを棚卸しをするようなことではありません」

N 「そんな助からぬ凡夫の私を救おうとされるのが阿弥陀仏の大悲の思し召しなのでですね」

D 「さきほど申しましたように、法蔵菩薩様は、衆生を救うために自己を投げ出し、衆生に身をささげ、代わつて地獄の苦を受けても後悔しないとまで決意したもうたのです。実に広大な大悲のお心ではありませんか」

N 「法蔵菩薩様は衆生を救うため、衆生に安樂を与えるために、自分の樂は求めずに、苦をいかほど受けてもいいという修行をなされたのです」

D 「ええ、それによつて私たちはこの煩惱悪業ゆえに助からぬ者でありながら、その罪を問われず、仏にさせていただけるのです。いわばこのまま

でアミダ仏によつて、私たちは全自己を受用していただけるのです」

N 「私のような粗悪な者をアミダ仏は引き受けて下さるのです」

N 「そういうお心はどこに知られるのですか」

D 「ことにアミダ仏の第十八願においてです。十八願は（我が名を称えよ）の仰せとして、南無阿弥陀仏の上に表されています」

N 「聞かされる南無阿弥陀仏に（我が名を称えよ）の大悲心を聞かされるのです。それが私の全存在を受けとつて下さるお言葉なのです」

D 「ええ、コノママの私は、我執我愛の罪でまつたくこの世に居り場もないような身です。にも関わらず、（汝のそのままを称えよ）の法蔵菩薩様の大悲の大力によつて、私はこの世に居らせていただけるのです」

N 「なおここで依正というのとはどういう意味ですか」

D 「依報と正報ということ、仏教用語です。環境と主体ということで、たとえばこの世（娑婆）が依報であり、その中に生きている主体としての

人である私は、正報です。正報とは主体であり、この主体が存在している環境を依報といいますが、正報と依報はいつも離れません」

N 「なぜ報という言葉がつかますか」

D 「それは環境も主体も過去の行いの報いと見る仏教の考えから、そう云われるのです。たとえば、（娑婆に人として生きていく）という基本的な制限は、その人の過去の行いの結果であると見るのです。私が人として生まれ、娑婆という環境の中に置かれたのは、私自身の過去の行いの報い（結果）であると聞きつけています」

N 「では浄土の依正も過去の行いの結果であると見るのです」

D 「ええそうです。しかしこの場合は迷いの衆生の行い（業）の結果ではありません」

N 「衆生の行いの結果でないとすれば、どなたの行いの報いなのですか」

D 「それはさきほど詳しく申しました、本質が仏である法蔵菩薩様の誓願とご修行の報い、お浄土は法蔵菩薩様が、私たちを仏にしたい、助けてほしい、本當の幸せを与えたいと願ひ、その願ひを実現す

るためにご修行をして下さった。その願と行の結果(果報)

によつて、浄土が出来あがり、私たちは浄土に生まれ仏にならせていただける。法蔵菩薩のご苦勞の果報、それが浄土の依正ということですよ」

N 「浄土の依正は私たちのために仕上げて下さった法蔵菩薩の大悲の願とご修行の功陰なのですね」

D 「ええ、それをここで聖人は(法蔵願力のなせるなり)で、私のためでありましたと聖人は受けとつておられるのです」

N 「法蔵菩薩様を遠い過去の菩薩であると受けとらず、過去の法蔵様の願行を現在のご自分の上に感じられているのですね」

D 「私たちも、この南無阿彌陀仏は法蔵菩薩様の願力が名号となつて喚びかけて下さっていること、そして法蔵願力のあらわれであるこの南無阿彌陀仏によつて、法蔵菩薩様が仕上げて下さった浄土に生まれ仏にしたいだけ、と喜ばせてもらいたいものですよ」

N 「法蔵願力を今の私の上に聞かせていただくのですね」  
D 「そのことで思ひだすのですが、松並松五郎さんのお話

の中で

私宅の御縁日に、員弁(いなべ)の師が親子連れで御来縁下さいました。後でぜんざいを召し上がって頂きました。後日お礼に「思い出しますぜんざいの味」と書いてありました。返信、同時に頭にひらめき、そのままお便り出しました。「今に思い出しますぜんざいの味」と。

「今」と言う場合は、以前頂いたぜんざいの味が今でも生きている時になる。「弥陀成仏のこのかたは、今に十劫をへたまえり」、昔の御苦勞が目の前に浮かんで来ることになります。南無阿彌陀仏

とあります。このお話しにも同じ思いが語られています」  
N 「この松並さんのお話しはどういう意味ですか」

D 「数日前にいただいたぜんざいの美味しかったことを(思)いだしますぜんざいの味」といわれたのを、さらに松並さんが(今に思ひだします)と(今に)の字を加えるだけで、

数日前にいただいたぜんざいの味が今もいきいきと味わわれる、というお心が現れます。もし(今に)がなければ、数日前のぜんざいが美味しかったと、過去のことを云つて

ただ、過去のことを云つて

るだけで、現在はその時とは違ふということになりかねません。数日前の美味しかったぜんざいの味が今も味わわれますという、いわばぜんざいの味が今も口の中で生きています、そういう感じを表すために松並さんは(今に)の二字を加えられたのです。法蔵菩薩様のご苦勞を現在に味わつておられるお心を、(今に十劫をへたまえり)の(今に)の二文字の上に深く感じておられるのです」

N 「そうすると、法蔵菩薩様の願行は十劫の昔に成就し終わった話と受けとらずに、法蔵様のご苦勞を現在の南無阿彌陀仏の上に(法蔵様のお陰でこんな私も助けていただけ、ああ有難い)と現在ただ今に感じる、それをいわれるのですね」

D 「ええそうです。それで聖人も法蔵菩薩様の願行、それが安樂仏土の依正として成就されている、それは私一人のためであつたと現在の上に喜ばれているのです」

N 「私たちも法蔵菩薩様の物語を過去の話にせず、現在南無阿彌陀仏と喚びかけられている私の上にいたただきたいですね。では次に

〈天上天下にたぐいなし

大心力を帰命せよ〉

についてお話し下さい。」

D 「天上天下の天上とは天上界のことで神々の世界、天下はそれ以下の世界といわれるのでしよう。いわば十方世界のことで法蔵菩薩が力を尽くされてできあがった安樂仏土であるアミダ仏のお浄土の功德は、世界中で比べものにならないほど尊いものがある。そのような法蔵菩薩様の広大な願心の力用(おはたらき)であるアミダ仏に帰命してくれよ、との聖人のお心ではないでしようか」

N 「帰命せよとは」

D 「アミダ仏の仰せに帰命せよ、順つてくれよ、とお勧め下さるのです。私たちはアミダ仏の仰せを軽く聞きながしているから、いつまでも惑い

がなくならないのです」

N 「アミダ仏の大悲の智慧から現れた仰せに順わず、自分の考えに留まつてしまうのですね」

D 「自分の考えをどれほど積み上げて、仏智いわゆる阿彌陀仏のお考えには到底及びません。仰せに順わないとは、ちよつと、豪華な船はできあがつて、船長が(乗つてくれよ)と喚びかけておられるのに、乗らないで、いつまでも真つ暗な海に漂つているようなものです」

N 「豪華な船というたとえは、このご和讃では法蔵菩薩様の願力であり、それは南無阿彌陀仏となつて、今の私たちに喚びかけておられるのですね」  
D 「ええそうです」

(了)

### 《二〇一五年度東本願寺基金御懇志報告》

懇志者名——(敬称略) 秋常芳子 浅野真由美 足立美明 幾代禮四郎 石川紀美子 石田豊司 井上守 岩谷龍 岩田能一 植田節美 宇田瑠璃子 小澤ちづ子 小畑住子 香川郁夫 角谷節代 加藤忠 川端靖雄 窪ナル子 児玉慶子 佐藤孝幸 下野誠二 下野知恵子 新保弘吉 寿賀晴剛 鈴木嘉子 谷村往世 寺坂典子 長井一江 中野タカ子 中村喜保枝 中村千和男 中村暢明 中村穂積 中村ホミ子 中村美重子 中村幹夫 中村智保子 中村美登子 中村諒一 中村康義 中山緑 七村文子 西塚祥子 西山泰夫 野原佳子 長谷川満 泰京子 濱秀子 早川節子 林久司 原崎佳水 平林憲子 福井靖弘 福村義明 藤村静 前田ふくの 町百合子 松田宏 宮伊勢子 三宅真知子 宮野勲 宮野エイミ 宮野道子 室塚良治 森和子 森野茂治 山下悦子 山下征洋 山下征洋 山本則幸 横田ミチ子 吉岡正人 吉田徳子 吉ノ藺睦枝 松本信子 塩出省吾 関有江増成和輝  
(総額二五五〇〇〇円)  
以上の皆様方より御懇志を賜りました。大谷派(東)本願寺の方に納付させて戴きます。有難うございました。



# 松並松五郎師のことども

③

松並師と膝をつき合わせてお話しをうかがっている中で、こんなことを聞いたことがあります。

松並師に親交があり、松並師を大変尊んでおられた真宗信心の名師といわれていたK師が松並師に、「私の知っている広島県の呉の人で、あなたに是非会いたい、会いたいといっているの、会いに行つて法談をしませんか」と松並師を誘われ、奈良から呉市まで行かれました。行つてみると、その人は造船会社の社長さんで、家は呉市の小高い丘の中腹にある非常に大きな家だったそうです。松並師が大きな玄関から入りますと、その社長さんが出てこられて「あなたが松並さんか、アツハハハ」と非常に喜ばれたのです。同時に松並さんが「ああ、あんたかいな、私にあいたい、あいたいというてたお方は。アツハハハ」と。そんなことがあつて後、そばにいたK師が「それじゃあ中に入つて仏法の話合いをしましょう」と松並師に言った時、松並師が「もう話は済みましたがなあ」と。K師きよとんと。

あいたいあいたいと私を念いづめの阿弥陀様が南無阿弥陀仏となつて、「お前にあいに来た、お前を引き受ける」と喚んで下さっていたのである。その阿弥陀仏に今ここで初めてあうが如くお会いする。阿弥陀様が私を尋ね求めてあいに来て下さっていた一声のお念仏、それをそうとは今の今まで知らなかった。名号を聞く時は、阿弥陀仏にであつて居る時。松並師が、「あんたやったか、あいたいあいたいというの」とは、称えているお念仏において「私にあいたいあいたいとあいにきて下さっている阿弥陀様。ようこそようこそ」と驚くほかに信心はない。この出遇いで話は済んだのである。そのほかに言うことなし。お助けは決定して言うことなしである。禿頭誠師の歌に

「朝夕に 口より出ずる 仏をば 知らずぎにし ことのくやしき」

とある。阿弥陀仏様がすでに来て下さつて、朝夕に私の口に耳に「ナムアマダブツ、ナムアマダブツ ここにいる、お前の親じゃぞ。助ける」と喚びづめに喚んで下さつていたことを今の今まで知らなかった。今、あいたいあいたいと喚んで下さる阿弥陀様にお会いした一念、「ああそうか、アツハハ」と喜ばざるを得ない。

また松並さんが実際に遭遇した出来事で、こんな話をお聞きました。

ある日松並さんが、大阪の工場での仕事を おえて奈良の家に帰るため近鉄電車に乗った。電車の中は満員だった。乗ってしばらくして

えて下さる。それを今の今まで知らなかったが、縁が熟して、今

ズボンのポケットに手をやると人の手が入っていた。スリだった。その手を持って次の駅で降りた。その手は若い男の子(十代)だった。それで松並さんは、(あんた、お金に困ってるんやろ。全部あげたいが、全部あげるとワシも困るんでなあ)と言つて財布に入っていたお金の半分を彼に与えた。そうしたら彼は黙つてお金を握つて泣きながら走り去つていった。そうしたら数年たつて、どこからか松並さんの居所を知つて、手紙が来た。その中に「あの時から、自分は心を入れかえて、今は新聞配達の仕事に励んでいます。本当に有り難うございました。」と書いてあつて、お金が入つていた。

こういう話も松並さんは決して自慢気に語られるのではなくて、笑いながらこんなこともあつたと軽く話された。聞いている私は、妙好人の逸話(いづ)に同じような話があつて、それを読んだ時は何か縁遠い昔の希有(けう)なお話と思つていたが、松並さんのこの話を聞かされて、現実にそういうこともあるんだと内心驚きの思いでお聞きしたことであつた。到底、私などの出来ることではないが、松並さんを通してお念仏の功德がこういうところにまで具体

化されるのだと知らされた。(了)

## 【法味寸言】

佐々木蓮磨師

出す用事のないこと。

一、自力をすてよとは、自力があつてもななくても、おタスケに関係がないということ。

一、今、生きてることが一大不思議。

一、煩惱の始末がつかぬということは、如来のおみぬき通りの姿。

一、五体がつまらぬようになるのは、如来に取られてゆく姿。

一、信心や念仏をつかめば、浄土への道はふさがる。

## 《盂蘭盆会法要》

八月十日(水)

午後二時始まり

\* \* \* \* \*

\* 法要の際、法名をご持参下されば仏前に安置させていただきます。

\* 八月十二日と八月二十一日の集まりはありません。

\* 八月二日(座談会)・八月六日(聖典学習会)はあります。